

イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」
-ヨハネ18章-

その日

(完成の時)

典礼歴の終わりが近づくと、主日の福音はイエスの公生活の最後の部分が朗読されます。エルサレム入場の箇所につき、世の終わりに関する教えが。そして今日は一年の終わりに当たり、世の終わりに明らかにされる、全被造物の『王』としてのキリストの神秘が朗読され、祝われる主日です。 真の王であるキリストが、この世の権力者の前に引き出されて尋問を受ける場面に、今日立ち会わされた私たちは、イエスの、ピラトとのやり取りの中で、“イエスが王であるとはどういう意味なのか” 確認し、これからの自分自身の歩みを、生活の中に方向づけていくよう招かれます。

かつて人は、自分が生きる上で必要な、自分の安寧を保証してくれる対象を求めて、その力を保有する『王』を欲してきました。私たち信仰の先輩たちは、もともと神を王に頂いた選民でしたが、彼らは、絶えない他民族との戦いに苦慮して、忍耐を必要とする信仰に望みをかける神よりも、武器を取って手っ取り早く戦闘指揮に立ってくれる、人間を王に据え換えたのです。神は彼らのかたくなさに任せ、自由を尊重して彼らが国を滅亡させるままにその経緯を見守った末、人類を救うために、真の王の姿を取って今、ピラトの前に立っておられるのです。「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問するピラトに、イエスは答えます。「私の国は、この世に属していない」と。これは、『全被造物を支配する創造主としての王である』との宣言なのです。

この世の王は、民を意のままに支配して文句を言わせず、絶対者としてふるまっているが、神が定める王とは、民のために建てられ、民の幸せを背負って、そのために与えられた権力で、民のために心砕く『神に仕える祭司』に他なりません。真の祭司は、世の辛苦をくぐり抜けた者でなければ『真の幸せ』が何であるか悟れず、苦しむ民に対処できません。それ故、キリストが受難を通し、死者の中から復活して王として来られたのは、『王』とは、世の最底辺に苦しむ民を救う、神から遣わされる『神の僕』であることを真理として人々に証しするためでした。

この期に及んで私たちは、どのような王を望んで今この場に立ち合わせているのか我が身に問いかけましょう。望んでいるのは、人間の支配か、神の支配か？

終末とは、遠い未来の出来事ではなく、今、私の生き方の延長にある出来事です。「その日」は恐るべき日ではなく、私たちが毎日、“御国が来ますように”と祈っている主の祈りが実現するときであり、本当の幸せを求めて生きている人には、歓喜迫る『完成の時』なのです。